

[論 文]

## インドの図書館運動史：二人の父 —サヤジラオ 3 世と S.R. ランガナタン—

よしうえ しょうえい  
吉植 庄 栄

(宮城教育大学附属図書館)

### 1. はじめに

2012 年 11 月、筆者は国立大学図書館協会の海外派遣事業にてインドを訪問する機会を得た。当地では図書館大会<sup>1)</sup>(NACLIN2012)に参加をした。その大会はインドの図書館運動に大きく影響を与えたとされるバローダ藩王サヤジラオ 3 世 (Maharaja Sayajirao Gaekwad III, 1863-1939, 在位 1875-1939) の生誕 150 周年、そのサヤジラオ 3 世が自領バローダ (現ヴァドーダラー) にアメリカ式の図書館を導入し図書館運動の拠点になってから 100 周年を記念した大会であった。

この大会で「インドの図書館運動史」<sup>2)</sup> についての発表を聞くことができた。内容はインドの図書館運動の概説と、サヤジラオ 3 世の偉業についての話であった。自らがインド図書館史に不勉強であることもあり、とても興味深くこの報告を聴講した。帰国後さらに知識を深めようと思い立ち、これまでの国内の先行研究を調査したが、残念ながら見つけることはできなかった。しかし後日、『図書館情報学ハンドブック』、丸善、1988、p.157. に石井敦氏の執筆によるサヤジラオ 3 世の事跡が掲載されているという情報を得た<sup>3)</sup>。それによると、「英国直轄地ではないバローダ王国のマハーラージャ・サヤジ・ラオ 3 世 (Maharaja Sayaji Rao III) は 1893 年に義務教育を導入し、大衆教育を計画、1906 年には図書館の普及に着手した。宮廷図書館を中央図書館とし、米国から図書館員を招いて図書館行政にあたらせた。そうして、数多くの村落図書館を設立した。」とあった。また

インドの図書館史的な記述について、佃一可編『図書・図書館史』に山田真美氏の執筆による仏教やナーランダ大学の図書館の記述<sup>4)</sup>があることを知った。しかし現時点で存在を把握しているものはこの2点のみである。このように日本の文献で、インドの図書館運動史とサヤジラオ3世をまとめて扱ったものは僅少であるため、インドの大会で見聞きした結果について報告を試みる意義があると考えに至った。

しかし、ただ報告をするのみでは翻訳による報告に留まってしまう。それを回避するため、発表を聞いた際に感じた疑問を解消すべく、さらに英語文献等を調査し、まとめることを考えた。特に疑問に感じたのはインドの図書館運動史における S.R. ランガナタン (Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972) の働きと、インドで聴いた発表が主に扱っていたサヤジラオ3世の業績との関連性についてである。ランガナタンが図書館の世界で活躍し始める1920年代はバローダ藩王国での図書館運動が開始された1910年代のすぐ後である。インドでの発表では触れられていなかったが、サヤジラオ3世の成果をランガナタンがよく見ていたことは想像するに難しくない。またサヤジラオ3世もランガナタンもしばしば「インド図書館運動の父」という敬称で呼ばれているのを文献で見<sup>5)</sup>。普通、父というものは一人である、という感覚で見ると、この点にも興味が惹かれる。特にランガナタンは日本でも唯一有名なインドの図書館学者・運動家であるが、一方バローダ藩王サヤジラオ3世はあまり知られていない。この違いにも興味を持った。

ランガナタンは1920年代後半から頭角をあらわし、インドの図書館運動の有力者の一人となる。第二次世界大戦後には国外から講演に招待されるような世界レベルの活動に進む。世界的な活躍もあり、インド政府から名誉号を得る地位に上り詰めるのであるが、その立身の背景や「図書館運動の父」と呼ばれるに至る要因がどのようなものであったのかについて、できる限り整理したい。

まとめると本稿では「図書館運動」観の検討を若干行った後に、インドの図書館運動史を概観する。その上で図書館運動の具体的事例としてバローダ藩王サヤジラオ3世とランガナタンの業績と経歴を見る。とりわけサヤジラオ3世の業績は諸文献からの情報をもとに紹介的に扱うこととする。最後に、サヤジラオ3世とランガナタンの図書館運動を比較し、二人の「図書館運動の父」について一考察を述べることにする。こ

れにより、インドの図書館運動史について古代からサヤジラオ 3 世を経て、ランガナタンに至るまでの流れをまとめて紹介しようとするものである。

なお地名であるが、初出に限り当時の地名と現代の地名を併記し、以後は当時の名称で記載する。

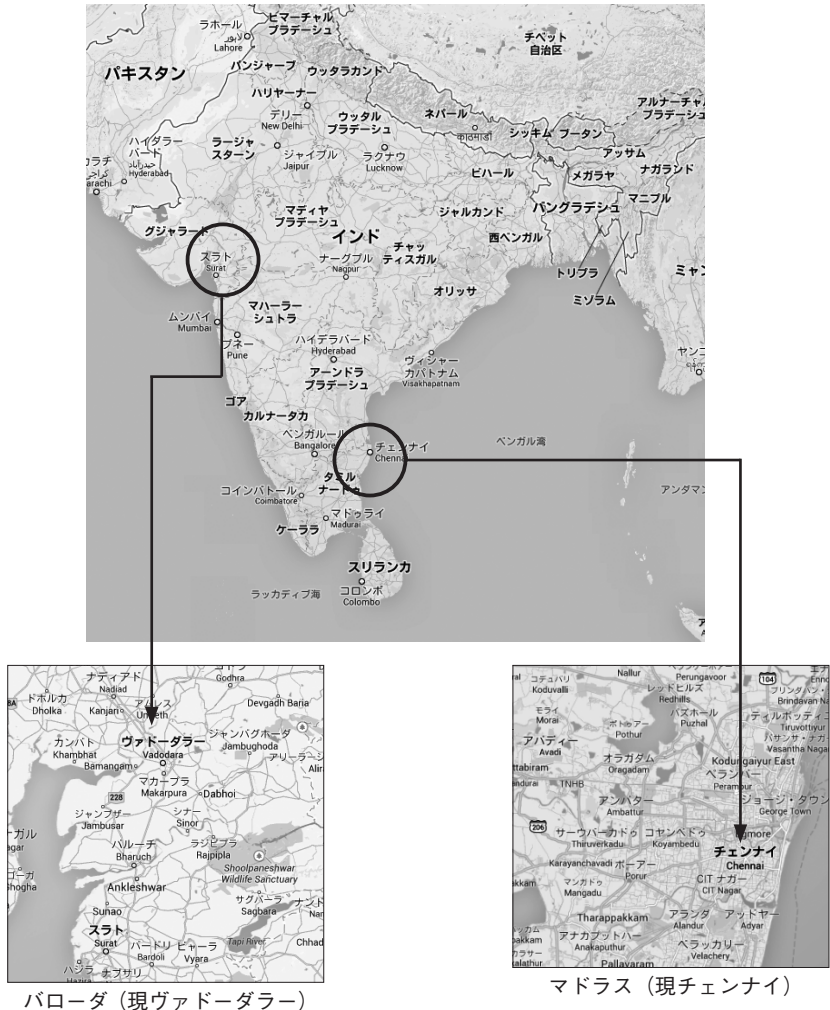


図1 インドにおけるバローダ・マドラスの位置<sup>6)</sup>

## 2. 図書館運動とは何か

本稿で扱う図書館運動とはどのようなものか、日本の議論とインドの議論を整理しつつ考える。筆者は図書館運動とは、住民運動といった社会運動という印象を持っていた。そのため NACLIN2012 での発表「The Library Movement in India」は、古代の図書館史から説き起こされるため、違和感を覚えた。特に図書館運動とはいわば、下からの改革であると考えていたので、王侯であるサヤジラオ3世を「図書館運動の父」とすることには、疑問を感じた。帰国後 インドの文献で「The Library Movement in India」というタイトルを持つ文献に当たると<sup>7)</sup>、基本姿勢は同じものが散見された。そこで「図書館運動：Library Movement」について最初に整理しておきたい。

### 2.1. 複合的な意味を持つ「図書館運動」

Baura (1993)<sup>8)</sup>によると図書館運動とは、広い意味を持ち、言外の意味も豊富で、複合的であるという。彼の定義では「その国・地域の人々に利益を与えるため、図書館サービスを全体的に向上させる複合的な運動」「本質的に、情報と知識により容易にアクセスできるような（公共）図書館サービスを実現する運動である。」としている。

複合的という言葉を挙げたが、図書館運動とは様々な考えがあるとして、次の様な意見があると列挙している。

- ・より多くの図書館を政府に設立させる運動
- ・ボランティア団体による社会サービスのこと
- ・識字運動のこと
- ・図書館法の制定運動
- ・図書館員の待遇と地位向上運動
- ・大衆教育、文化発展、交流や情報流通の促進運動

以上を紹介した上で、図書館運動の領域の広さが、様々な意見を生み出す原因になっているという。

次に図書館運動はなぜこのように複合的、そして多様な側面があるのかについて、原因を考えている。そもそも図書館とは何かというところから考えると、図書館とは社会の記憶を蓄え、自己教育を促進し、それを通して社会と経済を発展させるような社会機関である。教育と識字に密接な関係を持ち、社会のあらゆる面とつながりがある。例えばボラン

ティア・慈善活動との連携や産業界とのつながりである。以上のように図書館自体が社会のあらゆる面につながっており、さまざまな要請や援助を受けて活動するものであるから、図書館運動というものが複合的、混合的になると結論付けている。そして社会と非常に密接な関係を持つことから、図書館運動とは社会発展を促進する社会運動である、とも結論付けている。その点からも社会の指導的立場にある人に図書館の有用性と必要性を呼びかける運動でもあるとしている。

この図書館運動の起源を考えると、さらに社会との密接な関係が分かる。インドでは20世紀初頭の母国語教育運動と教育拡大運動が図書館運動の起源であり、それは後に（イギリスからの）独立運動と社会解放運動に発展していったという。

Roe (2010)<sup>9)</sup> は、ランガナタンの図書館運動をインド独立運動史、政治社会史的な背景で考察している論考で、前述のBauraが指摘しているように、社会の全体的な動きと図書館運動とは大きくつながっていることをランガナタンの分析を通して示している。それによると、ランガナタンの図書館運動は、独立以前にはインド国民会議派の大きな影響を受けており、インド独立運動との密接な関係があったことを指摘している。

Kumal (2006)<sup>10)</sup> は、この時代の村落における図書館運動について、ランガナタンの事跡を追っている。ここからも図書館運動というものが政治的・社会的背景と密接に結びついていることが分かる。

## 2.2. 広義と狭義の「図書館運動」

平成25(2013)年刊行の『図書館情報学用語辞典』第4版には次の様に説明されている。

### ○図書館運動 library movement<sup>11)</sup>

広義には、「図書館発展を目標とした運動」と定義され、第二次世界大戦から図書館界において展開されてきた。狭義には、1960年代以降の図書館員による図書館サービス充実に向けた運動と地域住民による図書館づくりを目指した運動を指す。運動の中心は、住民すべてが図書館サービスを楽しむための図書館づくりに置かれている。特に『中小都市における公共図書館の運営』（1963）の公刊以降、図書館運動の焦点は貸出を中心とした図書館サービスの全国的普及

に置かれるようになった。近年では町村立図書館の設置に向けた運動も活発化している。

これによると広義と狭義の「図書館運動」があり、狭義が指すものは1960年代以降の図書館員と地域住民の運動であることが分かる。前節のBauraの定義である「その国・地域の人々に利益を与えるため、図書館サービスを全体的に向上させる複合的な運動」「本質的に、情報と知識により容易にアクセスできるような（公共）図書館サービスを実現する運動である。」は、この広義の意味の「図書館発展を目標とした運動」と親和性があると思われるが、狭義の意味である1960年代以降の図書館員や住民主体の「図書館運動」に焦点を当てると「図書館運動史」が扱うものが限定されてしまう。

インドでも次のような定義がある。Kaula (1958)<sup>12)</sup>は図書館運動を「図書館のネットワークを意識的に創立し維持するもの」とし、その目的は「以前のように限られた利用者にもみではなく、必要とする人々全てに知識をもたらすため」であるとしている。この定義も「図書館ネットワーク」に限定的なため、狭義のものと言えよう。

### 2.3. 本稿の「図書館運動史」の視点

広義の「図書館運動」は複合的で範囲が広いものであり、このような考え方を取ると図書館活動に関する全てが図書館運動史に含まれる。古代からの図書館設置史も図書館運動史の一部分になる。そして「図書館運動」は時代が下るにつれて、そして図書館が発展するにつれて範囲が広がる。図書館の設置ですら新機軸であったものが、時代が下るにつれ、図書館は数多く設置され、それを支えるネットワークの構築や連携の動きに運動の焦点が移る。それら機関が充実すれば、社会の問題を解決するような「狭義」の意味での「図書館運動」が出てくる。「狭義」の意味となると時代や地域、そして社会の性格によって課題や問題が異なり、それこそ「広範」で「複合的」と言わざるを得ない。

以上の様に考えると「図書館運動史」を通史的に見る場合、図書館発展の事績を列挙することが妥当である。従って下からの運動のみに限らない「図書館運動」も取り上げるべきである。「図書館運動」を「図書館問題の解決」とした次の様な考えもある。

図書館運動は、社会運動としての図書館問題の解決をめざす社会運動である。社会問題とは“社会的な原因で生み出され、解決すべき課題として人々に措定され、社会的な制御・解決がめざされる事象”であり、社会運動とは“現状への不満や予想される事態に関する不満に基づいてなされる変革志向的な集団行動”である。すなわち図書館運動は、“社会的な原因で生み出され、解決すべき課題として人々に措定され”るような、図書館の“現状への不満や予想される事態に関する不満に基づいてなされる変革志向的な集団行動”である<sup>13)</sup>。

この解釈であれば、王侯が図書館問題の解決を目指したことも「図書館運動」と考えることができる。そこで本稿では広義の意味の「図書館運動」という視点でインドの図書館運動史を概観する。が時代は下り新たな解決すべき問題への対処が生まれることに則して、その時々々の狭義の意味の「図書館運動」も適宜取り上げる。

### 3. 図書館の設立<sup>14)</sup>

インドの図書館の設立史を概観する。

#### 3.1. 近代以前のインドの図書館：古代から中世の仏教と図書館

インドで歴史的に大きな存在であった図書館は、宗教的なものが挙げられる。まずは仏教の拠点であったナーランダ大学に存在した図書館である。現在のビハール州にあるナーランダには5世紀に仏教の研究拠点として、大学・僧院といった教育機関が建てられた。最盛期には1万人以上の仏教を学ぶ者、約1,500人の教員が生活していた。図書館は、ラトナサガラ、ラトノダディ、ラトナランジャカの三つの建物に代表されるものがあり、最も大きな図書館は9階建てであったとされる。蔵書には仏典に限らず、多種多様なものが収蔵されており、一説では500万冊以上を所蔵していたという。インド哲学・仏教学で著名なナーガルジュナが講義を行い、玄奘三蔵もここで学んだという。特に玄奘三蔵はこの経典約600部を中国に持ち帰って大乘仏教の東伝に寄与したという。イスラム勢力であるゴール朝の有力者で、デリー・奴隸王朝の初代スルタンになるアイバクの部将ハルジーが12世紀末から13世紀初頭（年については諸説あり）にここを攻め滅ぼし、その後復興することなく遺跡と

なっている。

### 3.2. 近代以前のインドの図書館：ムガル帝国の皇帝達の個人図書館

次に紹介するのがムガル帝国歴代皇帝の個人図書館である。初期ムガル帝国の皇帝達は、第6代のアウラングゼーブを除いた全員が文芸と音楽への支援に力を入れたため、図書館も発展した。

最初に紹介するのは第2代目スルタン、フマユーンの図書館である。彼の城は「プラーナ・キラー」と呼ばれ、宮廷の中に図書館を持っていた。第3代スルタンであり、その業績から大帝と呼ばれるアクバルの時代には、一種の「帝国図書館」ともいうべき図書館があったとされる。また彼は分類と図書蓄積方法の改良に関与していたともいう。第4代のジャーハンギールは、彼が移動するたびにそれに着いて行く個人図書館を持っていたという。

### 3.3. 19世紀イギリス影響下のインドの図書館

17～18世紀イギリスは、東インド会社を通してアジア貿易を中心とする経略を進めていた。1757年プラッシーの戦いでロバート・クライブがベンガル太守を破り、その結果ベンガル州は東インド会社が支配することとなった。ここを基礎に英領インドの基本が整備されていくことになる。そんな中、ベンガル州の中心、イギリスのインド経略の中心拠点であるカルカッタ（現コルカタ）に英国式の図書館が1835年に設立される。これがカルカッタ公共図書館である。

Datta (1970)<sup>15)</sup>によると、1808年にボンベイ（現ムンバイ）政府が「文献奨励基金（Funds for the Encouragement of Literature）」から出版されている図書の無料の複製を受け入れる図書館の登録をし始めたとあり、ボンベイには図書館が既に設立されていたということである。カルカッタ公共図書館の計画は、このボンベイの図書館の成功を受けて検討されたという。

一方、1858年インド大反乱を鎮圧したイギリスは、東インド会社によるインド支配に限界を感じ、インドを直轄植民地へと移行して首都をこのカルカッタに置く。1877年にイギリス王はインド皇帝も兼ね、東インド会社は解体される。その後図書館は、インド総督カーゾン卿時代の1902年のカーゾン法に基づき1903年一般公開の帝国図書館となった。1947年のインド独立後、1948年にこの図書館はインド国立図書館となる。



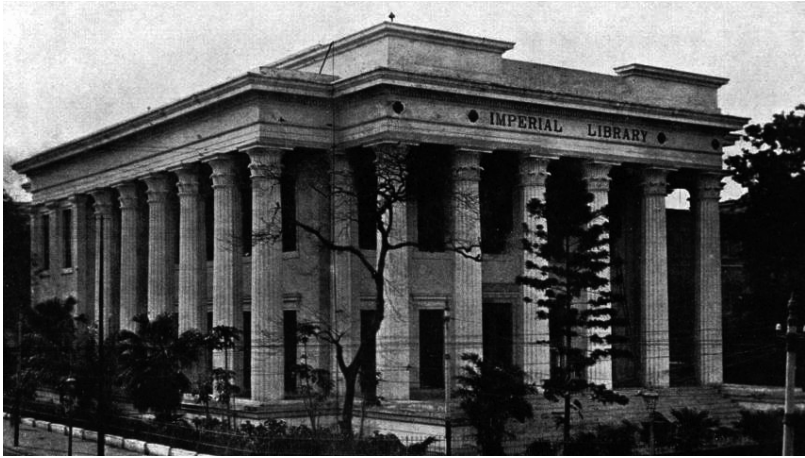


写真1 帝国図書館（カルカッタ）<sup>16)</sup>

### 3.4. 設立されるインドの図書館

19世紀インドでは、カルカッタの帝国図書館やボンベイのほかに、数々の地域や都市で図書館の設立が進められた。まさにインドの図書館整備の萌芽期であったといえる<sup>17)</sup>。

グジャラート地域：グジャラート語協会の図書館（Gujarat Vernacular Society along with library）（1848）、アンドリュウ図書館（1850）、ラング図書館（1856）、バルトン図書館（1882）、ダーヒー＝ラクシュミ図書館（1892）

ビハール地域：ガヤー公共図書館（1855）、ホダー＝バクシュ東洋公共図書館（1876）

ラージャスタン地域：ビーカーネールの政府図書館（1867）、ジャイプールの王立公共図書館（1899）

マドラス地域：マドラスのコンネマラ公共図書館（1860）、アディヤール図書館（1886）

インド中央部：インドール総合図書館（1852）

藩王国：コーチン藩王国・トゥリチュールの公共図書館（1873）、パロータ藩王国・パロータ図書館（1877）、ジャンムー＝カシミール藩王国の図書館（1879）、ニザーム藩王国・ハイデラバードの図書館（1891）

### 3.5. 高等教育機関の図書館

インドで初の近代的な高等教育機関は1800年にカルカッタに開学したフォート・ウィリアム・カレッジであった。ここはイギリスのインド統治に必要なベンガル語やヒンディー語といった現地語を学ぶ学校として成立した。ここには教材として活用するため、関連する現地語の文書を所蔵する図書館があったとされる。1857年にはインドで初の近代的な大学(University)としてカルカッタ大学が建てられた。これはロンドン大学を真似たつくりであったという。これら高等教育機関の整備に伴い、次のような図書館が設立されていった<sup>18)</sup>。

カルカッタ大学図書館<sup>19)</sup>(1857)、ボンベイ大学図書館(1857)、マドラス大学図書館(1907)、パンジャブ大学図書館(1908)、ベナレス・ヒンドゥー大学図書館<sup>20)</sup>(1916)

## 4. 図書館協会、職員養成、刊行物、図書館法

図書館の設立は近代以前にも世界各地に記録が残るが、これら図書館協会等の図書館運動はとくにインドでは近代以降、それも20世紀になってからの活動である。極めて近現代的な活動と言えよう。これらについて概観する。

### 4.1. 図書館協会の創立

Baura<sup>21)</sup>は図書館協会についてその役割を論じている。彼によると図書館協会は図書館運動を促進するために極めて重要な役割を果たすという。図書館協会の目的は、図書館運動をより強化し広げることである。図書館協会の機能は次のものを挙げている。

- ・図書館員間の交流促進(図書館員間で親近感を持たせる)
- ・図書館員の行動倫理や行動規範の作成
- ・図書館員の技能向上
- ・図書館サービスの向上
- ・図書館の拡大の担い手

このような機能を果たすために、会合や大会、研修会等を開催し、グループ学習活動を指導し、広報のため展示会やプロパガンダを行うとしている。

インド各地で図書館の設立が進む中、図書館の協力組織である図書館協会も次の様に創立され図書館運動を担っていった<sup>22)</sup>。

アンドラ・デサ (1914), ベンガル (1925), バローダ (1926), マドラス (1928), パンジャブ (1929), インド図書館協会 (1933), トランヴァンコール (1933), 連合州 (1935), ビハール (1939), デリー (1953)

#### 4.2. 図書館員養成組織 (図書館学教育機関)

さて次に着目したいのが、図書館員養成組織の設立である。これまで図書館の設立と図書館協会の設立を取り上げたが、図書館という場の拡大と協会という運動の担い手の成立は、これまで以上に人材の養成と確保が必要となる。図書館協会の役割にも職員の技能向上があるが、一歩進むと人材育成と供給にその役割を拡大することは自然なことである。協会の働きで立ち上げたものが、時が進むにつれて高等教育機関の一つの学科に持ちあがるマドラスのような例もある。インドでの図書館員養成組織は次のように設立されていった<sup>23)</sup>。

帝国図書館 (1901), バローダ (1911), パンジャブ大学 (1915), アンドラ・デサ図書館協会 (1920), バンガロール (1920), マドラス図書館協会・マドラス大学 (1929), ベナレス・ヒンドゥー大学 (1941), ボンベイ大学 (1944), カルカッタ大学 (1946), デリー大学 (1947)

#### 4.3. 機関誌や刊行物の創刊

次に機関誌など出版物の刊行であるが、これは図書館協会の交流促進事業、技能向上、広報などあらゆる面で必要とされることから求められる事業である。加えて図書館業務や図書館学の研究交流の場となり、業界の活性化と発展に寄与するものである。また単行本のような刊行物は、図書館員養成組織で使用されるテキストとして活用されることにもなり、研究のみならず養成の場とも密接な関係を持つ。

図書館協会や図書館員養成組織の成立と時を同じくして、インドの各地で様々な機関誌や刊行物が創刊されていく<sup>24)</sup>。

バローダ：Library Miscellany (1912-1919)

アンドラ：Granthalaya Sarvaswamu (1916), Indian Library Journal (1924-1936), Andhra Granthalayam (1939-1941)

マドラス：The Library Movement : a collection of essays by diverse

hands (1929), The Five Laws of Library Science (1931), Memoirs of the Madras Library Association (1940)<sup>25)</sup>

パンジャブ：Modern Librarian (1930)

ベンガル：Bulletin of the Bengal Library Association (1937)

インド図書館協会：Library Bulletin (1942-1946), Abgila: Annals, Bulletin and Granthalaya of the ILA (1949-1953), Journal of the ILA (1955)

ビハール：Pustakalaya (1948)

#### 4.4. 図書館法の制定運動

図書館システムの確立を目指す図書館法は、図書館ネットワークを公的なものとし、より効率的な図書館サービスを提供する寄り所となるものである。図書館法の制定運動に関してはランガナタンの多大な貢献があるが、これについては6.3.5.で改めて詳説する。次に各州の法制化の年代を示すが、全て独立後に達成されたものである<sup>26)</sup>。

マドラス (1948), アンドラ・プラデーシュ (1960), マイソール (1965), マハラシュトラ (1967), 西ベンガル (1979), マニプリ (1988), ハリヤナ (1989), ケララ (1989), ゴア (1993), ミゾラム (1993), グジャラート (2001), オリッサ (2001), ウッタル・プラデーシュ (2005), ウッタラカンド (2005), ラージャスタン (2006), ビハール (2007), チャッティースガル (2007), ポンディチェリー (2007), アルナーチャル・プラデーシュ (2009)

以上、インドの図書館運動史を概観した。次にこの中から、大きな事跡を残した2地区、すなわちバローダ藩王国とマドラス地域について、2人の人物、サヤジラオ3世とランガナタンの紹介を通して見ることにする。

### 5. バローダ藩王国における図書館運動: サヤジラオ3世とW.A. ボーデン<sup>27)</sup>

#### 5.1. バローダ藩王国とガイクワッド家

グジャラート州ヴァドーダラー (Gujarat, Vadodara) は、近代にはバローダ藩王国 (Baroda State, 1721-1947) の首都であり、ガイクワッド家 (Gaekwad) の藩王が代々支配していた。

かつて18世紀には、インド中部のデカン高原を中心とした地域に、ヒ

ンドゥー諸侯の連合体であるマラータ同盟（1674-1818）があり、イスラム王朝であるムガル帝国と覇権を争っていた。

ガイクワッド家は、マラータ同盟の支配層の一氏族である。この家の始祖とされるピラジラオ（?-1732）はマラータの將軍で、バローダとその近隣の領域を1721年から支配した。その後、マラータ同盟は3度にわたるイギリス東インド会社との戦争、つまりマラータ戦争によって弱体化する。第2次マラータ戦争（1803-1805）の際に、ガイクワッド家はイギリス東インド会社と単独講和を結び、イギリスの統治体制に組み込まれる形でバローダ藩王国が成立する。

マラータ同盟はその後、第3次マラータ戦争（1817-1818）に破れて滅亡し、ムガル帝国もインド大反乱の失敗で滅亡し、イギリスがインドの覇者となると、バローダ藩王国は滅ぼされず保護国として、イギリス領インド帝国の一部を担った。バローダ藩王国は、ハイデラバード藩王国、マイソール藩王国と並んでインドの3大藩王国の地位にあり、藩王への礼砲は21発と、国家元首級の待遇であったという。

バローダ藩王国は、インド独立時にボンベイ州に吸収され、後にグジャラート州発足時に、グジャラート州の一部となった。王室の子孫は現在も同地域で暮らしている。

## 5.2. サヤジラオ 3 世



写真2 バローダ藩王サヤジラオ3世<sup>28)</sup>

### 5.2.1. サヤジラオ3世の人物

1863年3月11日に生まれたとされ、1875年に藩王に即位したサヤジラオ3世は、バローダ藩王国の近代化を推し進めた。彼は若年時、地方の穏やかな環境で育ったが、太后ジャムナバイの養子となり傍系から王位に就いた。彼自身は大学などによる学校教育を受けなかった。しかし良質の教師による個人教育を施された。彼自身は強烈的な学習意欲を持っていたため、宮廷内の図書室にしばしば足を運び、本を読むことで自ら学んだという。偉大な教師による個別教育と、膨大な図書に囲まれた図書室での自学自修が、彼を偉大な政治指導者、教育者、そして支配者にしたともいえる。

彼はまた旅行を好み、イギリスおよび欧州に数回渡航している。彼はいわゆる新世界であるアメリカ合衆国の視察をとくに希望しており、1906年と1910年にそれが叶った。アメリカ滞在時には、ニューヨーク、ワシントン、フィラデルフィア、ハーヴァード、シカゴ、コロラド、サンフランシスコを訪問し、カナダにまで足を伸ばした。その視察の中で、アメリカの生活、文化、そして政府の統治機構を見聞し、特に社会を支える教育システムを学んだ。

彼は12才で王位を継ぎ、約63年という長い在位期間の間バローダ藩王国の近代化につとめ、1939年2月6日に享年75才で死去した。

### 5.2.2. 芸術面での業績

次に彼の業績を概観する。

まずはインドの芸術家の保護である。彼の庇護の下、著名な芸術家が創作活動を行ったとされている。またイギリス人建築家に洋の東西のスタイルを混合した宮殿、ラクシュミ・ヴィラス宮殿を建築させるほか、宮廷のコレクションを集めた美術館、マハラジャ・ファター・シン・ラオ美術館を建てさせた。

### 5.2.3. 社会・経済・政治面での業績

彼は社会の下層民の地位向上や農業改革、数々の社会資本整備を行った。具体的にはバローダ藩国内に鉄道と電気を引き、後述するような領民の教育環境の向上にも尽力した。経済面では今もインドでの有力銀行の一つであるバローダ銀行を1908年に設立し、彼の支配領域の経済

活動，そして海外交易の原動力にしようとした。

#### 5.2.4. 教育

彼は義務教育（初等教育）を1893年に試行し、1906年までに自領の隅々まで実施した。被教育者は階層を問わず全員が、初等教育を無料で受けることができた。これは当時の藩王国の中で唯一の実績であるだけでなく、イギリス領インド帝国の中でも唯一のものであった。彼は「教育は全ての改革の基本であり、我々の現在の状況を救済する唯一の方法である。」という言葉を残している。

#### 5.2.5. 図書館

彼は領民に義務教育を行うためには、その支えとなる図書館が必須と考えていた。すなわち与えた教育を、図書館での恒常的な自己教育によって保障することが必要であると考えたのである。彼は与えた義務教育の内容を、その後の人生を通して継続することができない限り、屋根の無い家を建てるようなものだと考えていた。その屋根に当たるものがまさに図書館であり、彼はこの解決策を供給する必要があると信じていた。

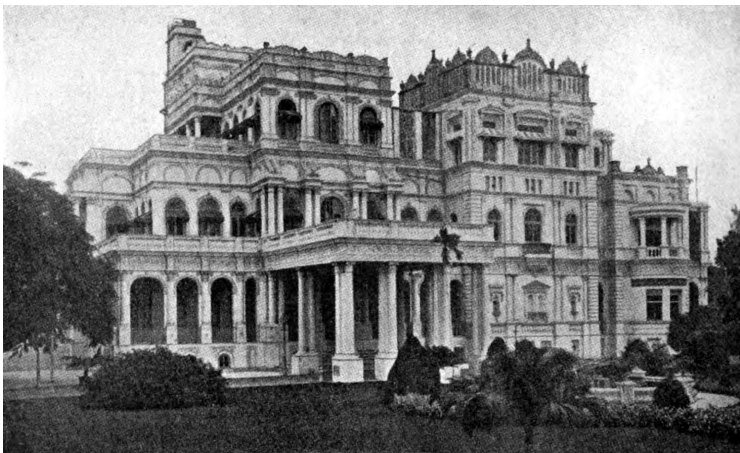


写真 3 Central Library of Baroda<sup>29)</sup>

これはアメリカ視察にて、図書館サービスが人々の社会的地位、経済能力・そして教育状況を向上させるものであることを目の当たりにし、非常に感銘を受けたことが背景にある。そしてついに彼は自領にアメリカ型の公共図書館システムを導入することを決心し、そのために、かのC.A. カッターに学んだW.A. ボーデン (William Alanson Borden, 1853-1931) をバローダ藩王国に招いた。そして彼に図書館システムを構築させた。この図書館運動はインドの図書館界のモデルケースとなり、これら目覚ましい功績を導いたサヤジラオ3世は「インド図書館運動の父」と呼ばれるようになるのである。

### 5.3. ボーデン

ボーデンについて、略伝を紹介する。

ボーデンは1853年4月24日、マサチューセッツ州ニュー・ベッドフォードにて誕生した。彼の父は裁判官であった。コーネル大学で学び、サイエンスの学位を取った。1883年ボストン・アシーニウムで働き、C.A. カッターの手ほどきを受けた。1887年にはヤングメンズ・インスティテュートで働きはじめ、ここには23年間在職した。

1910年から1913年の3年間、サヤジラオ3世に招請されバローダ藩王国で図書館業務に尽力した。中央図書館の館長となったボーデンは、数ある藩王国内の図書館の連携と階層化を進め、インド資料分類法や図書館員養成プログラムを作るほか、バローダ図書館組合基金の創立やその機関誌“Library Miscellany”も刊行した。

彼はどちらかという図書館の技術者であったという。彼はブックスタンドや新聞のファイルなどをデザインした。その他に図書館の分類を発展考案し、図書カードの開発にも携わった。アメリカに帰国後、しばらく職が無い生活を送ったが、十進分類の改良などに務め、1931年11月16日に亡くなった。

### 5.4. バローダ藩王国の図書館システム

ボーデンが構築したバローダ藩王国の図書館システムについて、概略を紹介する。



#### 5.4.1. 図書館システムの概説

ボーデンが1910年にバローダ藩王国に至った際、領内には241を超える図書館があり、少なくとも10万冊の資料が所蔵されていたという。しかしそれらは適切な運営がされていないように見え、資料は適切な方法で管理されていないと考えられた。そこでボーデンはアメリカ式の管理法と業務法を提案し、サヤジラオ3世はそれを裁可した。1911年1月には藩王国政府の教育局の一部局として図書館局が設立され、中央図書館を基点として4つの地区図書館、45の町の図書館、そして千を超える村落を結ぶ図書館システムが構築された。ボーデンは図書館局の局長に就任した。

これはインドで初めて、統治機関が運営する無料の図書館システムであった。その後20年以内にバローダ藩王国の領民は、都市部・近郊部を問わず、その85%が図書館に来館したという。発足時の全図書館の合計冊数は約31万冊、これらの資料はのべ約27万冊が約5万人の利用者に貸し出されたという。

職員であるが、3人の幹部職員、12人のライブラリアン、15人の職員、映写機担当と製本担当が各1人ずつ、26名の雑役夫が在籍していた。

#### 5.4.2. 図書館員養成

サヤジラオ3世は、ボーデンとクラークの協力で、図書館学の訓練学校を立ち上げた。この学校は奨学金を給付する1年のコースのものだった。最初の年は6名のボンベイ大学の卒業生、それと6名の大学生が集まったという。バローダ藩王国内の図書館を維持する人材を養成するだけでなく、他のインドからの希望者にも門戸を開いていた。サヤジラオ3世の構想は、インド中の学びたい者に無料で図書館学の教育を行う場を提供するというものであった。しかし（他地区からは）ほとんど受講生が集まらずサヤジラオ3世を失望させた。これはサヤジラオ3世が描いていた図書館が当時のインドには先進的であり、人々にその有用性が理解されなかったと分析されている。後にバローダ・カレッジには大学院級の図書館学コースが開講されたという。

#### 5.4.3. 刊行物

1912年にサヤジラオ3世の後援で機関誌“Library Miscellany”が刊

行された。これは図版入りの季刊誌であった。刊行当時ではインドで唯一の図書館業務について書かれた雑誌であった。刊行は、1919年まで続いた。

#### 5.4.4. 本館 (Main Library), 貸出図書館 (Lending Library), 参考図書館 (Reference Library) 及び閲覧室

中央図書館は新聞閲覧室, 貸出用図書・参考図書コーナー, サンスクリット等文書室, 児童コーナー, 女性用閲覧室, そして事務室があった。中央図書館の主な資料は, 合計約6万冊の図書と5千5百点の文書であった。1910年にラクシュミ・ヴィラス宮殿にあったサヤジラオ3世の図書室からマンドヴィ (Mandvi) にあるこの中央図書館に約2万冊の寄付があった。

本館の閲覧室は1年を通して毎日14時間開館していた。一日に約6百人が来館したという。貸出図書館は, 平日は午前8時から10時30分まで, 午後は16時30分から19時まで, 日曜日は午前8時から11時まで営業していた。当時アメリカやイギリスでは多くなってきていた開架式を採用していたが, これはインドでは大胆な試みであった。

#### 5.4.5. 所蔵資料と貸出

1916年から1917年にかけて総貸出数は, 約5万2千冊で1開館日あたり184冊であった。著者, 書名, 主題によるカード目録が完備されていた。資料には英語のみならず, 地元の言語であるグジャラート語, マラーティ語も多数所蔵していた。また古代語であるサンスクリット語の古典やパーリ語も所蔵していた。中央図書館は, それら古典文書を編集し「Gaekwad's Oriental Series」として刊行した。

#### 5.4.6. 児童コーナー (Children's Section)

児童コーナーには約2千冊の英語児童書が所蔵されていて, 子どもたちを満足させた。サヤジラオ3世の指示で, プレイルームも併設された。これはアメリカでは普通であったが, インドでは非常に斬新であった。この部屋には, 絵や旗, 模型やおもちゃ, そして本が十分に供給されていた。そして屋内で遊ぶことができるゲームなどもあった。時折, 地元の言語による無料の映画上映もあったという。

この概況を見ると, 図書館の児童コーナーにとどまらず, 児童館的な

要素も多分に含まれていたようだ。

#### 5.4.7. 移動図書館課 (Travelling Libraries)

移動図書館の部署には、約1万4千冊の蔵書があった。離れた村落や工場、そして他の図書館等へ、頑丈な木箱に本を入れて運び、貸し出した。貸し出されたセットは、2-3ヶ月の期間で、他のセットと交換された。運搬費用はこの移動図書館の部署が支払った。

この移動図書館は、現代のいわゆる移動図書館車を使った移動図書館とは全く異なり、数ヶ月単位で遠隔地に配本サービスをするものであったようだ。

#### 5.4.8. 視覚教育部 (Visual Instruction Branch)

映画と幻灯機、講義や立体写真を使った教育や娯楽のための部署である。一般の人々のみならず、とくに読み書きができない人達への教育と娯楽提供のために役立った。5千以上の資料があり、作品の自作もしていた。機器は持ち運びができるもので、遠隔地での提供も可能であった。

#### 5.4.9. 展示 (Exhibitions)

何度も図書館に関係する話題で展示会が開かれた。1916年4月にはシェークスピアの3百年祭に関する展示を開催した。

#### 5.4.10. 分類

ボーデンは、図書館の所蔵資料を分類するためにC.A. カッターの展開分類とメルヴィル・デューイの十進分類の長所を組み合わせた分類法を創り上げた。アルファベットの数である26分類に主題を分け、そのアルファベットに十進分類的な数字を付与して内容を表現するものである。

以上、バローダ藩王国サヤジラオ3世の図書館運動を概観した。続いてランガナタンの図書館運動を見る。

## 6. ランガナタンの図書館運動

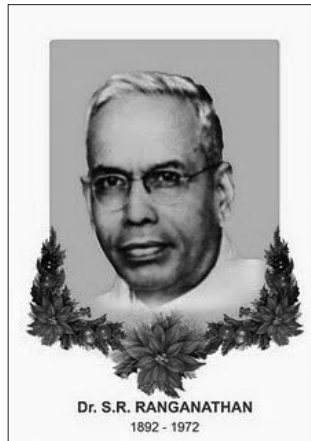


写真4 S.R. ランガナタン<sup>30)</sup>

### 6.1. ランガナタンの前半生：『図書館の五法則』まで

ランガナタンは言わずと知れたインドの図書館学者である。彼はインド・マドラス州：現タミルナドゥ州出身（1892年8月12日生まれとされている。）の数学者・図書館学者で、『図書館学の五法則（The Five Laws of Library Science）（以下『五法則』）』『コロソ分類法』など多数の著作を残している。前節で紹介したバローダ藩王国サヤジラオ3世と、アメリカ人ライブラリアン、ボーデンの活躍の時期である1910年代、彼は高等教育を受け、数学者・数学教育者としてのスタートを切ったところであった。

彼はマドラス大学図書館長になる1924年1月（32歳）まで数学に専念していたので、図書館とは縁がなかった。そのため彼が図書館人となる頃にはバローダ藩王国の成功は一定の成果を得ており、ボーデンもアメリカに帰国してしまった（1913年）後のことになる。彼は図書館長になることについてあまり興味が持てなく、就任した後も館長とは名ばかりで、事務処理の仕事に退屈さを感じていた。そのため数学者として教壇に戻ることを前の職場である教員養成大学に訴えたりなどした。その年の9月、彼はイギリスに留学することが決まっていたので、大学当局

は彼がイギリス留学を終えてから前の仕事に戻るか判断するべきだという助言をして、帰国するまでその席を残すようにして彼を送り出した。

イギリス留学後の彼はロンドン大学図書館学部で学び、そこでW.C.B. セイヤーズ等に習った。ここで最新の図書館を見学し図書館学を学び、彼は気持ちをあらため図書館を一生の仕事にするのである。ランガナタンは図書館業務の背景にある何かしらの法則性を明らかにし、一過性で発展性がない図書館の仕事を体系的な学問にまとめようと考え始めた。1925年7月にインドに帰国したのちも探求を続け、マドラス大学の図書館の実践と研究を背景に1928年のマドラス図書館協会の講演会で『五法則』を発表する。それら研究と発表の成果を1931年6月にマドラス図書館協会出版物の2番目の図書として、刊行するに至る。

## 6.2. ランガナタンとバローダ藩王国

彼がバローダ藩王国を実地検分した記録は無いが、その『五法則』<sup>31)</sup>にてバローダ藩王国のことを次の様に書いている。

### 385 バローダ

くすべての人に図書を（筆者注：第二法則のこと）>提供するために十分な便宜を与えられたのはバローダである。バローダの州（筆者注：藩王国のこと<sup>32)</sup>）財務長官の言葉によれば、「バローダの図書館運動はマハーラージャー（Maharaja）によって創始され展開された民衆教育の周到な計画の一環である。……補助金を基礎にした無料公立図書館の計画は、1910年に導入され、初めは貧弱であったが、今日では、町、村の図書館及び移動図書館にわたるネットワークに成長し、州人口の6パーセント以上にサービスしている。」

### 3851 成果

「これらの活動の中心はバローダの図書館である。この図書館に付属して東洋研究所、婦人図書館、青少年図書館、そして視覚教育部門がある。それから郡と市の図書館が45館に達し、1万9000人の利用者と22万2000冊の蔵書を有している。規模は小さくなるが、661の村立図書館があって、3万7000人の利用者と25万冊以上の蔵書を有している。図書館を持たない村へは移動図書館課がサービスを受持ち、1926-27年度に123のセンターに対して418箱、本の

冊数で1万3400冊が貸出された。」

この通り、バローダ藩王国は第二法則の恩恵を大いに受け、インドの中でも成果を上げた地域として挙げられている。原文に当たると「It is only in Baroda that it has been given the fullest facilities to provide BOOKS FOR ALL.」（下線は筆者による）とあり、当時のインドでは唯一、施設も体制も充実している、とランガナタンは評価している。

また後に彼の著作『図書館と図書館運動 (Libraries and Library Movement<sup>33)</sup>』にて、一番の先頭にバローダ藩王国を図書館先進地域として紹介している。それによるとバローダ藩王国の図書館運動は、早くから図書館界では有名であり、インド人初めてのライブラリアン J.S. クデルカーがポーデン後の図書館運営体制を引き継ぎ、M.N. アミンが協力して、中央図書館と数多くの地域図書館、そして移動図書館のネットワークを発展させたとある。またそのバローダ藩王国の刺激を受けてマイソール藩王国が1914年には二つの近代的公立図書館を設立した旨もあわせて紹介している。

以上ランガナタンがバローダ藩王国の図書館に触れている点を列挙した。どの文も好意的に書かれており、恰好の先例として羨望のまなざしで見えていただろうことを感じさせる。後にランガナタンが図書館法制定に尽力し、上からの図書館システム構築と整備に拘ったことに少なからず影響を与えたのではなかろうか。

### 6.3. マドラス時代：ランガナタンの初期図書館運動

次にランガナタンの図書館運動について事跡を列挙する。

#### 6.3.1. マドラス大学図書館

まず彼の職場であるマドラス大学図書館のサービス拡充である。彼はマドラス大学図書館の開館時間を延長し（午前7時～午後4時→午前7時～午後8時）、無休開館を実施した。目録法と分類法の近代化を行い、館外への貸出サービスと参考調査サービスを開始した。参考調査業務には専門のライブラリアンを配置した。1936年には新館に移転し、より機能的な図書館となった。1945年の退職まで、この図書館の充実に精励した。

### 6.3.2. マドラス図書館協会

1928年1月にマドラス図書館協会が設立され、彼は事務局長に就任する。ここでの活動は次の通りである。

- ・図書館員養成のための夏期講習開講
- ・マドラス図書館協会叢書 (Madras Library Association Publications) の刊行
- ・マドラス州に図書館関連法の制定を働きかけたこと、つまりマドラス州公共図書館法案の起草
- ・移動図書館による、村落への図書館サービスの提供

### 6.3.3. 図書館員養成

図書館員養成のための夏期講習開講は、1929年から開始され1931年にはマドラス大学の図書館学講座となる。ランガナタンはこの講座の中で『五法則』や『コロソ分類法』等の講義を行った。

### 6.3.4. 刊行物

1929年からマドラス図書館協会叢書の刊行が始まる。彼はこの叢書の中で『五法則』『コロソ分類法』をはじめとする13の著作を刊行し、図書館員養成のテキストとするほか、5つの法則を拠り所とした図書館諸業務のマニュアルを整備していった。1940年には逐次刊行物であるMemoirs of the Madras Library Associationが刊行される。

### 6.3.5. 図書館法の制定運動

Baura<sup>34)</sup>によると、ランガナタンは図書館運動を「図書館法の制定運動」として明確に位置付けたという。ランガナタンは1930年にベナレス（現ワラナシー）で開催された第1回全アジア教育大会にて図書館法のモデル案を示した。目指していたものは、図書館システムの構築、つまり都市圏から地方まで広域に渡る図書館のネットワークの樹立である。言い換えると、ランガナタンの図書館法制定を通じた図書館運動とは、図書館の階層構造、つまり国家中央図書館、州の中央図書館といったネットワークを具現化し、一国の図書館を全体的に発展させることを目指したものであったのである。ランガナタンは「初期の孤立した図書館は図書館運動の舞台にはならなかった、その代表がカルカッタの帝国図書館で

ある。」<sup>35)</sup>と述べており、図書館運動は孤立した図書館ではなく、複数の図書館の連携で行われるもの、という考えを持っていた。

彼の図書館法モデル案は、『五法則』の中に主な部分が掲載<sup>36)</sup>されている。この案は、全インドに大きな影響を与え、最初にベンガル州で法制化の動きに至った。しかしこの時はインド総督がこれを認めず、失敗に終わった。

次に、マドラス図書館協会が運動を行った。ベンガル州での失敗例を参考にしつつ、マドラス図書館協会評議員にして、州政府の立法議会の議員であるパーシャー・アフメッド・サイドから1933年に立法議会へ提出された。この法案は、全会一致で採択された。1934年の特別委員会での審議に進んだが、しかしここで予算関係者に冷淡な態度を取られ、1936年の立法議会解散で実現しなかった。1937年にマドラス州立法議会に再度提出されたが、この時は州知事により却下された。

結局この草案は独立後の1948年に実現する。それに続きインド各州での法制化が4.4.で示した様に進むのである。

### 6.3.6. 移動図書館

2頭の牛が引く運搬車に図書を積み込み、村落を回ったものである。1931年に開始され、1932年まで242村のうち75の村にサービス拠点が設けられた。

### 6.3.7. 全インドの図書館運動へ

マドラスでの仕事のみならず、1933年にはインド図書館協会 (Indian Library Association) の創立に参画した。創立当初にランガナタンの会長就任打診があったが、彼はマドラス大学図書館とマドラス図書館協会の仕事で忙しいことを理由に辞退した。その代わりにマドラス図書館協会の代表として、インド図書館協会に参画し、会則草案を起草するほか、第一号終身会員に選出された<sup>37)</sup>。

## 6.4. マドラス以後：ランガナタンの後期図書館運動

1945年3月に反対派の追い落としにあい、長年勤めたマドラス大学を辞職して去った。その後、ペナレス・ヒンドゥー大学に赴任する。ここでは図書館学大学院の設立と大学図書館の改革に携わった。しかしここ



でも反対派によって追い出された。1947年のインド独立と時を同じくし、デリー大学の図書館学講座の教授に転任し、1949年までこの地位にある。ここでは図書館学博士課程の創立に携わった。また1944年から1953年までインド図書館協会の会長を務める。彼は協会をより科学的な装いにし、UNESCO、FID等の国際機関と連絡を密に取り、インド国外も視野に入れた活動をしていた。この事が彼の国際的知名度と理解を増加させたとも見ても良いであろう。

彼はこのころドキュメンテーションの概念に注目していた。今まで図書一冊のタイトルや形状の目録を取っていたが、このドキュメンテーションの概念は、本の中身である章や節、記事ごとに情報を整理してアクセス可能にするというものである。この考えの下、科学技術発展のための機関として、インド国立科学ドキュメンテーションセンター（INSDOC: Indian National Scientific Documentation Centre）の創立に寄与する。当時の新生インド政府は科学技術の発展を重点課題としており、そのためには学術情報の流通を円滑にする必要があった。学術情報のミニ単位であるドキュメンテーションの研究はこの背景で、国策の方向とも一致したのである。またデリーで教鞭を振るう傍ら、1948年に外遊をして欧米諸国で講演を行う。

その後1955年には拠点を息子が住むスイスのチューリッヒに移す。海外での講演が多くなったためなど様々な理由があるという。1957年に帰国すると同年にインド政府から名誉称号パドマシュリーを与えられる。

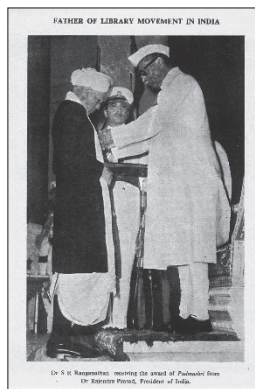


写真5 名誉称号パドマシュリーを受けるランガナタン<sup>38)</sup>

時を同じくしてデリー図書館協会 (Delhi Library Association) が主催する「インドの図書館運動」と称した大会が開催され、彼は基調講演を行った。この大会ではインド各地の図書館運動のこれまでが報告され、とりわけマドラスでの彼の成果が振りかえられるのである<sup>39)</sup>。その大会ではすでに彼を「図書館運動の父」と讃えている。

1962年にはマイソール州 (現カルナータカ州) バンガロール (現ベンガルール) に住む。インド統計大学 (Indian Statistical Institute) のドキュメンテーション研究訓練センター (Documentation Research and Training Center) で名誉教授となり、後進の育成に努めた。それと同時に私財を元に図書館学の発展のための基金として、1963年にサラダ・ランガナタン図書館学基金 (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science) を設立した。そのままバンガロールで暮らした彼は、1972年9月27日に亡くなった。享年80才であった。

このように見ると一生涯にわたってインドの図書館発展に尽力し、特に後半生は世界的な活動、例えば国際情報ドキュメンテーション連盟での講演や役職を務めるなどに至ったように見える。しかしインド独立後の彼は国際的な評価が高まるという反面、インドでは孤立しており、取り巻きに囲まれながら同じことを繰り返すだけの人物になっていた、というRoe (2010) のような評価もある。これによると、戦後の独立したインドでは彼の理想が受け入れられず、新生インド政府への働きかけで実現に至ったものは少なかったという。独立以前では、独立運動と社会改革運動と図書館運動は、大変親和性があった。しかし独立後、新政府が統治する新生インドでは行過ぎた理想論による図書館運動は、かえって邪魔なのである。その結果インドの政治と切り離れてしまったとのことである。或いは彼がドキュメンテーション研究のような理論研究に没頭し理想主義に益々偏るあまり、新生インド社会とも切り離れていったとしている。また、国際的に評価の高い著作についても、ランガナタンの名著は、主に1920-1930年代に世に出たものに限られ、その後の作品は抽象的で曖昧なものが多い、としている。以上を考慮すると、彼が「インド図書館運動の父」と呼ばれる場合、1920-1930年代、つまりマドラス時代の彼の業績を指して言われているのではなかろうか。

## 7. 考察

最後にサヤジラオ 3 世とランガナタンについてその共通点や異なる点を考え、何故「図書館運動の父」が 2 人存在するのかについて考察を加える。

### 7.1. サヤジラオ 3 世とランガナタンの共通点

第一に挙げるのは、図書館システム、つまり数ある図書館のネットワーク化を重視していたことである。サヤジラオ 3 世がボーデンをアメリカから招いた時にはすでにバローダ藩王国には図書館が複数存在していた(3.4. 及び 5.4.1. を参照)。ボーデンに期待していたことは、アメリカ型の図書館システムを導入し、領内の図書館のネットワーク化を進め、領内どこでも領民が図書館を活用することができるようなインフラ整備を進めることである。その目的の達成のためには移動図書館まで整備するほどであった。

一方ランガナタンも、マドラス州での法制化への努力は、中央館を基点にした州内に広がる図書館サービスのネットワークを目指したものである。マドラスを離れた後もインド全土のそれを目指した。彼は『五法則』の中での第二法則「すべての人にその人の本を」と述べているが、この考えはまさに図書館システム樹立を目指す法制化運動の理論的骨格になっていたのであろう。2.2. で示した「図書館運動とは図書館のネットワークを意識的に創立し維持するもの」という Kaula の考えに基づく、二人とも図書館運動のまさに先導者と言えよう。

次の共通点は、二人が教育を重視し、図書館をその一形態と考えていたことである。サヤジラオ 3 世は図書館をあくまでも「義務教育の成果を維持するためのもの」と考えていたことから、主眼は領民の教育水準の向上であった。つまり領民の教育水準を上げることが第一目標で、それを目指して、無料の初等義務教育を自領の人々、階層や出自を問わず全てに施し、教育された内容が人々に維持されるよう、そのための機関として図書館の必要性を重要視していたのである。その目的のためアメリカ式の教育制度、図書館制度をインドに導入し、その結果として当時のインドとしては画期的な教育と図書館を施すことになった。

ランガナタンも『五法則』をはじめとする各種著作の中で図書館の本質は教育の一形態<sup>40)</sup>である、ということ述べている。彼の著作である『新教育と学校図書館 (New Education and School Library)』では、学校

で行った教育は図書館（当書では学校図書館）における自律的で動的な学びがその内容を深め補完する、と述べている。

## 7.2. サヤジラオ3世とランガナタンの相違点

相違点には次のものが挙げられる。藩王であったサヤジラオ3世と研究者・実務家であったランガナタンとはお互い全く立場が異なる。サヤジラオ3世はみずからの命で、バローダ藩王国にアメリカ型のネットワークシステムを構築することができた。しかしランガナタンは「社会の指導層に働きかける」という図書館運動をする必要があった。彼の理想通りに進まないのは当然である。これは図書館協会の意味するところの差異も表わす。マドラスでは図書館協会が創立されるが、バローダ藩王国ではボーデンやその後継者は中央図書館局といういわゆる統治機構の管理者として、各館の交流や人的成長を担っていた。そのため同じ業務をする主体が異なる。

その立場の違いから第二に挙げられるのは、成果の性質が全く異なる点である。サヤジラオ3世は実際の図書館実務をやる立場にないのと言うまでもないが、ランガナタンは図書館学研究と実践を行う立場にあった。ランガナタンは、図書館協会や職員養成機関の仕事、そして多数の著作を残した。海外にも大きな影響を与え、国際機関の役職も務めた。

第三に時代に課された課題の違いである。バローダ藩王国の図書館運動はインドの中では先駆的な試みであった。しかしこれはサヤジラオ3世の自領の近代化構想の中で挑戦されたものであり、背景がランガナタンとは異なる。ランガナタンは、独立以前はRoeに基づく住民や社会、そして政治の要請を受けて、民衆に教育を広げる、という課題があった。これは植民地からの解放運動という側面がある。戦後は独立インドの発展とその独立の維持のために、高い科学力と工業化の実現を目指すことが課題であった。そのための学術情報流通、つまりドキュメンテーション研究に専念することになる。

最後にこれも立場の違いに帰するのだが、二人のモデルとした国の違いである。インド独立以前のランガナタンはイギリス植民地下の大学図書館員であるため、雇われている身である。その立場上、その制限と要請の中で図書館運動を行った。顕著であることは図書館学を学ぶために留学した先はイギリスであった。しかしサヤジラオ3世はイギリスの保

護国であっても王侯であるため、自分が望むようアメリカに渡航し、そのシステムも模範にすることができたのである。私見ではあるがイギリスから独立したアメリカの発展を参照したいという気持ちが働いたのかもしれない。

### 7.3. 2人の「図書館運動の父」考察

為政者であるサヤジラオ3世はインフラ面と運営体制の整備をした、いわば上からの改革者であった。しかしその反面、実務家ではないので、図書館関連の著作、つまり理論書や実務書を残さなかった。彼にとって図書館運動とは、あくまでも教育行政の整備の一部であり、バローダ藩王国の領民の教育レベル向上運動の一環として行われたのである。

一方研究者であり実務家であったランガナタンは図書館の理論面の研究と実践面の整備・充実、そして図書館協会での活躍や、図書館専門職教育、そして図書館法の草案作成など実務と研究教育、そして広域連携での活動に特徴がある。いわば下からの改革者であった。しかし政治的実権は持ち得なかったため、図書館法の制定運動は進まず、彼の描いたインド一国の図書館システム化構想は実現に至らなかった。

以上のように二人の業績を見ると、内容の棲み分けがなされているように思われる。活動の広さに注目すると、サヤジラオ3世の図書館運動はほぼバローダ藩王国内に限定された活動であることに対し、ランガナタンはマドラスのみならず、インド図書館協会の樹立に関与するなど、全インド的な活動も多い。そのみならず海外での評価が高い。コロン分類のファセット構造等、理論面でも独特なものがあるため国際的に注目され、戦後は海外での講演の機会が多くあった。これが彼の名声を世界的に広め、図書館史に名を刻む原因となる。

以上、サヤジラオ3世とランガナタンの両方が「インド図書館運動の父」と呼ばれることについて、立場・事績の違いから成果が棲み分かれていることをまとめた。最後に比喩的な見解を示せば、サヤジラオ3世は外枠の導入、例えると家の外側を建設したという意味での「父」であり、ランガナタンは外枠の中味を充実させた「父」、つまり家の内装を整えた「父」と言える。サヤジラオ3世は家の内装作業を、ボーデンやその後継者達に任せた。インドという視点で見れば、ランガナタンも後継者として、その内装作業に精励した者と言える。そして彼の内装作業は

世界的に評価されるに至る。しかしランガナタンは、外壁の修正も行おうとしたものの、果たせない事が多かった。内装の充実に従い外壁の変更も必要となる。しかし内装家が外壁をそう容易には変更できないことを示唆する好例と言えよう。

## 8. おわりに

残った課題を挙げる。

インド独立運動とサヤジラオ3世との関係である。Roeによるとバローダ藩王国の近代化は、イギリス領インド帝国の中でも特筆される業績だったようで、イギリスのインド総督が直轄している地方の低調さが際立つものだったようだ。ここまでの熱意で近代化を推し進めたサヤジラオ3世はイギリスからの独立やインドの統一についてどのように考えていたのであろうか。図書館運動はインドの独立運動と密接であった、という解釈に従うと、サヤジラオ3世の図書館運動、そして諸改革運動はインドの独立運動と関係があったのではないかと思われるが、この件については次の機会にまとめてみたい。

次にボーデンはなぜバローダ藩王国に渡航し、なぜ3年という短い期間でアメリカに帰国してしまったかである。NACLIN2012での発表は、サヤジラオ3世の偉業紹介という面が強く、サヤジラオ3世はどのようにボーデンと会い、そして彼を招聘しようと考えたのか、そしてそのボーデンはたった3年という短い期間でインドを離れたのか、そしてその後、同じような図書館後発地域での業務を行わなかったのか、これらについて、が疑問のままとなった。今後の課題としたい。

またランガナタンの理論に、バローダ藩王国での成果がどの程度影響を与えているかについてである。大会でサヤジラオ3世とバローダ藩王国での図書館運動について発表をした Mayank J. Trivedi 博士に後日尋ねた所、ボーデンの生み出した分類法は、ランガナタンのコロン分類法に似ているので、何かしら影響を与えたのかもしれない、とのことであった。このことについても継続して調べてみたい。

最後にほんの感想である。

現在のバローダ地域、つまりヴァードーダラー地域は今も図書館先進地域かというところでもないのである。サヤジラオ3世の時代の図書館を引き継ぐ公共図書館があるにはあるが、ホームページすら持たない図書

館であり、マハラジャ・サヤジラオ大学 (Maharaja Sayajirao University of Baroda) に充実した大学図書館 (Smt. Hansa Mehta Library) があるものの、その蔵書数は60万冊規模であり、日本の大学と比較するとそれほど巨大とも言えない。パローダの成功は過去のものとなり、何故その後すたれてしまったのかについては調査不足で明確な回答を得ることができなかった。ただ、そこにサヤジラオ3世の名が広まらなかった原因があるのではないかと考えている。つまり偉大なパイオニアの後を継ぐものが出なかったことである。人々の教育に熱心だったサヤジラオ3世が、運動の継承者を得なかった事は、一種の皮肉と言えよう。

### 【本稿について】

本稿は2013年度日本図書館文化史研究会研究集会個人研究発表(平成25年9月15日 於:東北大学)にて発表した「インドの図書館運動史:ランガナタンを手がかりに」の内容に、当日得たご意見・ご指摘、その後の調査を加筆して論文化したものである。

### 【謝辞】

本稿を作成するに当たり、次の方々にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。筑波大学附属図書館 加藤信哉様、国立国会図書館 鈴木宏宗様、東北大学附属図書館 村上康子様、よねいかついちろう様、(以上 五十音順) 及び Maharaja Sayajirao University of Baroda, Smt.Hansa Mehta Library, Dr.Mayank J.Trivedi 様

### 【参考文献】

- P.N. Kaula (ed.) ; with a foreword by S. R. Ranganathan. *Library movement in India*. Delhi Library Association, 1958, 153 p.
- 宮部頼子「ランガナタン研究の概況および分析」『図書館史研究』6号, 1989, p.73-101 .
- ランガナタン [著] ; 竹内愨解説『図書館の歩む道:ランガナタン博士の五法則に学ぶ』日本図書館協会, 2010.4, 295 p.
- 西願博之「インドの出版事情と図書館 -- 出張報告」『アジア情報室通報』8 (2), 2010.6, p.2-9.
- H.K. Kaul, Mayank J.Trivedi [ed.]. *Knowledge, Library and Information Networking: NAACLIN2012*. New Delhi, delnet, 2012, 352 p.

注

- 1) DELNET. "NACLIN2012" [online]. [引用日: 2013-08-16]< <http://www.naclin.org/index2012.html>>

NACLIN (National Convention on Knowledge, Library and Information Networking) とは、DELNET が主催する図書館大会であり、筆者が参加した 2012 年の大会は、グジャラート州ヴァドーダラー (旧バローダ) にあるマハラジャ・サヤジラオ大学 (Maharaja Sayajirao University of Baroda) にて 3 日間、開催された。「未来のための図書館: コレクション, 能力, そして協力 (Libraries for the Future: Collections, Competencies and Cooperation.)」をテーマとし、これからのインドの図書館について活発な討論や発表を行っていた。

DELNET (Developing Library Network) とはインドを中心とした図書館協力組織で、約 4,200 館 (主に高等教育機関の図書館) が加盟する。主な目的は、加盟館の資源の共有と、ネットワーク化の促進を掲げており、事業としては加盟館による総合目録の構築や資料の共同分担購入, MARC21 と DDC による書誌情報の共通化, データベース, 電子ジャーナルコンソーシアムの運営, そして人材育成が挙げられる。

- 2) Megha J. Vyas, Jaydeep D. Mehta, Mayank J. Trivedi. "The Library Movement in India: With Special Reference to the Contribution of the Maharaja Sayajirao Gaikwad". *Knowledge, Library and Information Networking: NACLIN2012*, edited by H.K.Kaul; Mayank J.Trivedi, New Delhi, delnet, 2012, p.12-27.

当日のプレゼンテーションファイルは次の通り。

Megha J. Vyas, Jaydeep D. Mehta, Mayank J. Trivedi. *The Library Movement in India: With Special Reference to the Contribution of the Maharaja Sayajirao Gaikwad*. [online], [引用日: 2014-04-09], < [www.naclin.org/material12/TSI-P2-MeghnaJVyas.ppt?](http://www.naclin.org/material12/TSI-P2-MeghnaJVyas.ppt?)>

- 3) 国立国会図書館鈴木宏宗様からこの記事の紹介を頂いた。この場を借りて御礼申し上げたい。

- 4) 佃一可編集; 佃一可 [ほか] 共著『図書・図書館史』(現代図書館情報学シリーズ / 高山正也, 植松貞夫監修, 11) 樹村房, 2012.4, 227 p.

山田真美氏による「4章 インド・ナーランダ大学図書館と仏教伝播」は p.41-49.

- 5) 例えば次のものがある。

・ サヤジラオ 3 世を「図書館運動の父」と記述するもの。

Murari Lal Nagar. *Maharaja of Baroda : the prime promoter of public libraries*, International Library Center, 1992, 77 leaves.

B.D.Panda. *Handbook of public library system*. Anmol, 1993, p.23.



- ・ランガナタンを「図書館運動の父」と記述するもの。

P.N. Kaula (ed.) ; with a foreword by S. R. Ranganathan. *Library movement in India*, 1958. とくに p.7.

Mohamed Taher and Donald Gordon Davis, Jr. *Librarianship and library science in India : an outline of historical perspectives*. (Concepts in communication, information & librarianship / general editor, S.P. Agrawal, 60) . Concept Pub., 1994, p.174.

- 6) Google maps [online], [引用日 :2014-04-03]<<https://maps.google.co.jp/>>
- 7) 確認した文献には以下のものがある。  
P.N. Kaula (ed.) ; with a foreword by S. R. Ranganathan. *Library movement in India*. Delhi Library Association, 1958.  
Free Online UGC Net, Library Movement in India. [online], [引用日 :2014-04-04], <<http://www.netugc.com/library-movement-in-india>>
- 8) B.P.Baura. "Library movement in India: problems & prospects," *Grantha: Indian Journal of Library Studies*. v.4 (1-2) ,1993, p.9-18.
- 9) George Roe. "Challenging the Control of Knowledge in Colonial India: Political Ideas in the Work of S.R.Ranganathan." *Library & Information History*. v.26 (1) , 2010.3, p.18-32.
- 10) Sunii Kumar. "A journey of rural library movement in India: retrospect and prospect," *Herald of Library Science*. Vol.45 No.1/2, 2006. p.17-27.
- 11) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会『図書館情報学用語辞典』第4版, 丸善, 2013, p.173.
- 12) P.N.Kaula. "Library Movement in India", P.N. Kaula(ed.); with a foreword by S. R. Ranganathan, *Library movement in India*. 1958, p.58.
- 13) 日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会『図書館ハンドブック』第6版, 日本図書館協会, 2005, p.40. 当節は山口源治郎氏による。
- 14) 当節は次の文献を要約・引用・参考にした。  
R.K.Bhatt. "Academic Libraries in India: A Historical Study," *International Conference on Academic Libraries (ICAL-2009)* , 5th to 8th October, 2009, Delhi University Library System[online]. [引用日 : 2013-08-16]< [http://crli.du.ac.in/ical09/papers/index\\_files/ical-10\\_180\\_494\\_2\\_RV.pdf](http://crli.du.ac.in/ical09/papers/index_files/ical-10_180_494_2_RV.pdf)>  
Sumeer Gul, Samina Khan. "Growth and Development of Oriental Libraries in India," *Library Philosophy and Practice*, 2008 [online]. [引用日 : 2014-01-30] <<http://digitalcommons.unl.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1186&context=libphilprac>>

Megha J. Vyas, Jaydeep D. Mehta, Mayank J. Trivedi. "The Library Movement in India: With Special Reference to the Contribution of the Maharaja Sayajirao Gaikwad." *Knowledge, Library and Information Networking: NACLIN2012.*, 2012, p.12-27.

Bimal Kumar Datta. *Libraries & librarianship of ancient and medieval India*, Atma Ram, 1970, 247 p.

P.N. Kaula (ed.) ; with a foreword by S. R. Ranganathan. *Library movement in India*, 1958.

Megha J. Vyas, Jaydeep D. Mehta, Mayank J. Trivedi. *The Library Movement in India: With Special Reference to the Contribution of the Maharaja Sayajirao Gaikwad*. [online], [引用日 :2014-04-09], < www.naclin.org/material12/TSI-P2-MeghnaJVyas.ppt?>

とくにナーランダ大学の図書館については佃一可編『図書・図書館史』, 2012.4 の p.44-45 の箇所(山田真美氏による)を主な典拠にしている。

15) Bimal Kumar Datta, *Libraries & librarianship of ancient and medieval India*, 1970, p.100.

16) University of Houston, Digital Library[online]. [引用日 2013-08-16]<<http://digital.lib.uh.edu/collection/p15195coll29/item/12>>

17) この箇所は便宜的に現在のインドの地域名称にて分類した。また当時の藩王国での設立は、イギリス直轄州のものと分けた。

設立年代等は, Megha J. Vyas, Jaydeep D. Mehta, Mayank J. Trivedi. *The Library Movement in India: With Special Reference to the Contribution of the Maharaja Sayajirao Gaikwad*. [online]. [引用日 :2014-04-09], < www.naclin.org/material12/TSI-P2-MeghnaJVyas.ppt?> のスライド 10-12 を主に引用し, P.N.Kaula. "Library Movement in India", P.N. Kaula (ed.); with a foreword by S. R. Ranganathan. *Library movement in India*, 1958, p.58-75. 等を補足的に参照した。

18) 設立年代等は, Megha J. Vyas, Jaydeep D. Mehta, Mayank J. Trivedi. *The Library Movement in India: With Special Reference to the Contribution of the Maharaja Sayajirao Gaikwad*. [online]. [引用日 :2014-04-09], < www.naclin.org/material12/TSI-P2-MeghnaJVyas.ppt?> のスライド 13-14 を主に引用にした。

19) 1937年に採用されたライブラリアン, ニハール・ランジャン・ロイ博士はインドではじめてデューイ式十進分類と英米目録規則を導入した。

20) 現ウツタル・プラデーシュ州のワナラシー・ヒンドゥー大学の図書館である。5章で紹介したサヤジラオ3世が20万ルピーを寄付したことで設立された図書館であるので, 彼の名前を取ってサヤジラオ=ガイクワッド図書館という。

- 21) B.P.Baura. op.cit. p.15.
- 22) 創立年代は、P.N.Kaula. “Library Movement in India,” P.N. Kaula (ed.) ; with a foreword by S. R. Ranganathan. *Library movement in India*, 1958, p.58-75. を中心に当該書のその他の箇所を適宜参照した。
- 23) 設立年代は、Megha J. Vyas, Jaydeep D. Mehta, Mayank J. Trivedi. *The Library Movement in India: With Special Reference to the Contribution of the Maharaja Sayajirao Gaikwad*. [online]. [引用日 :2014-04-09], < [www.naclin.org/material12/TSI-P2-MeghnaJVyas.ppt?](http://www.naclin.org/material12/TSI-P2-MeghnaJVyas.ppt?)> のスライド 17-18 を主に引用し、P.N.Kaula. “Library Education in India,” P.N. Kaula (ed.) ; with a foreword by S. R. Ranganathan. *Library movement in India*, 1958, p.42-49. を補足的に参照した。
- 24) タイトルと刊行年代は、L.G.Parab. “Library Literature in India” , P.N. Kaula (ed.) ; with a foreword by S. R. Ranganathan. *Library movement in India*, 1958, p.50-57. を主に引用し、S.R.Ranganathan. “Libraries and Library Movement,” *Current Science*, 1941.1, v.10 (1) , p.11, [online]. [引用日 :2014-01-28]<<http://www.ias.ac.in/jarch/currsci/10/11-14.pdf>> 等を補足的に参照した。
- 25) 『The Library Movement』と『The Five Laws of Library Science』の2冊は単行本として刊行され、Madras Library Association Publications のそれぞれ No.1 と No.2 に当たる。『Memoirs of the Madras Library Association』は逐次刊行物である。
- 26) 制定年代は、Megha J. Vyas, Jaydeep D. Mehta, Mayank J. Trivedi. *The Library Movement in India: With Special Reference to the Contribution of the Maharaja Sayajirao Gaikwad*. [online]. [引用日 :2014-04-09], < [www.naclin.org/material12/TSI-P2-MeghnaJVyas.ppt?](http://www.naclin.org/material12/TSI-P2-MeghnaJVyas.ppt?)> のスライド 15-16 を主に引用し、C.S.Krishnamurti. “Library Legislation in India,” P.N. Kaula (ed.) ; with a foreword by S. R. Ranganathan. *Library movement in India*, 1958, p.32-41. を補足的に参照した。
- 27) 当節は次の文献を要約・引用・参考した。

Megha J. Vyas, Jaydeep D. Mehta, Mayank J. Trivedi. “The Library Movement in India: With Special Reference to the Contribution of the Maharaja Sayajirao Gaikwad,” *Knowledge, Library and Information Networking: NACLIN2012.*, 2012, p.12-27.

Mayank Trivedi. “Baroda Library Movement,” *15th NACLIN Souvenir*, P.32-37.

Shankar B.Nelogal. “Remembering Maharaja Sayajirao Gaekwad III : An Instrospection” , *15th NACLIN Souvenir*, P.25-31.

Janardan S. Kudalkar. *The Baroda library movement : a short account of the origin and growth of the Central Library Department of the Baroda State*, 1919.

Murari Lal Nagar. *Maharaja of Baroda : the prime promoter of public libraries*, 1992.

Murari Lal Nagar. *William Alanson Borden : An Apostle of International Librarianship*, International Library Center, 1992, 202 p.

- 28) The Bank of Baroda. *The Heritage* [online]. [引用日 2014-04-08]<[http://www.bankofbaroda.com.sg/page.php/page.php?page=history\\_3&sec=tb](http://www.bankofbaroda.com.sg/page.php/page.php?page=history_3&sec=tb)>
- 29) *Encyclopedia Americana*, v. 17, 1920, p.366-367.[online]. [引用日 2014-02-11]<[http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Americana\\_1920\\_Libraries\\_-\\_Central\\_Library\\_of\\_Baroda\\_India.jpg](http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Americana_1920_Libraries_-_Central_Library_of_Baroda_India.jpg)>
- 30) *Indian Library Association* [online].[引用日 2014-04-08]< <http://www.ilaindia.net/Images/SR/TheFather/drsranganathanaugust91892september271972thefatheroflibraryandinformationsscienceinindia.jpg>>
- 31) S.R. Ranganathan. *The Five Laws of Library Science*, 2nd ed., Bombay, Asia Publishing House, c1963, p.186-187, 翻訳: S.R. ランガナタン著; 渡辺信一, 深井耀子, 洪田義行共訳『図書館学の五法則』日本図書館協会, 1981, p.179-180.
- 32) 英語での藩王国は, “Princely State” であるが, 注 27 の Kudalkar の報告書タイトル, …the Central Library Department of the Baroda State のように単に “State” と書かれる。そのため「州」と訳したと考えられる。なお直轄州は “Province” 等である。
- 33) S.R.Ranganathan. “Libraries and Library Movement,” *Current Science*, v.10 (1) , 1941.1, p.11, [online], [引用日 :2014-01-28]<<http://www.ias.ac.in/jarch/currsci/10/11-14.pdf>>
- 34) B.P.Baura. op.cit. p.12.
- 35) S.R.Ranganathan. “Libraries and Library Movement,” *Current Science*,v.10 (1) , 1941.1, p.11, [online]. [引用日 :2014-01-28]<<http://www.ias.ac.in/jarch/currsci/10/11-14.pdf>>
- 36) S.R. Ranganathan. *The Five Laws of Library Science*, 2nd ed., c1963, p.208-236, 翻訳: S.R. ランガナタン著『図書館学の五法則』, 1981, p.200-218.
- 37) Indian Library Association. *The Father of Library Science in India*. [online].[引用日 2014-04-10]< <http://ilaindia.net/About%20Dr.%20S.%20R.%20Ranganathan-ILA.html>>
- 38) P.N. Kaula (ed.) ; with a foreword by S. R. Ranganathan. *Library movement in India*, 1958, p.7.
- 39) Ibid. p.9-147.
- 40) S.R. Ranganathan. *The Five Laws of Library Science*, 2nd ed., c1963, p.81, p.354,

翻訳：S.R. ランガナタン著『図書館学の五法則』1981, p.80, p.331.

以上に記述があるほか、拙稿でも詳説している。

拙著「S.R. ランガナタン『図書館学の五法則』に見られる教育の概念－図書館を人間形成の観点で見る－」『教育思想』39号, 2012, p.97-114.